はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。心理テストではありません。自由な作品鑑賞・解釈力でもありません。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。**赤／青／緑**（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）**の三色**をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる**　→　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テストの現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

１　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

２　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

３　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ１点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

４　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、１点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（１点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（１点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意 ……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇒ 心身
語句 → 心身の一体性

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし**……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方

……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランＣをオススメします。

プランＡ……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランＢ……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランＣ……第三講までプランＢで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランＡ
プランＤ……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、ＡとＢを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランＡ、奇数の講義ではプランＢというように

予習の時間

＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講のみ予習要りません）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンＣがオススメです。

パターンＡ……右の基本時間通り
パターンＢ……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンＣ……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点

……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率

（例えば第二講なら全部で十五題。十題以上正解なら目標クリア。記述問題は、各「ポイント箇所」を一題と数えましょう）

○　私大……………（第二講・九講・十講・十三講・十四講・十五講・十七講・十九講・二十講・二十一講・二十三講）
→六十五％以上

○　記述問題をふくむオリジナル…………（第五講・二十四講）**→六〇％以上**

○　共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その１その２・三講・四講・六講・七講・八講・十一講・十二講・十六講・十八講・二十二講）**→七〇％以上**

○　復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。 勉強したような気になるだけで、現代文の場合、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。スタディサプリでも多くの講座が用意されています（高３用講座だけでなく、高１・２用講座も合わせて活用してください。こちらも実際の良質な入試問題が素材ですから）。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Ｚ会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Ｚ会編集部（Ｚ会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

教材選定について

- 有名大学およびセンター試験の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（異文化理解論・家族論・認識論・芸術論・哲学論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第十三講　民俗学……p.11
第十四講　旅論・異文化論……p.17
第十五講　家族論……p.23
第十六講　旅論その２……p.30
第十七講　戦争論・近代化論……p.39
第十八講　漢文学論……p.46
第十九講　都市論・故郷論……p.56
第二十講　文学論・文芸論……p.63
第二十一講　メディア論・情報化社会論……p.69
第二十二講　《小説その４》日常と非日常の対比……p.75
第二十三講　日本文化論・建築論……p.88
第二十四講　言語論……p.93

第十三講　民俗学

次の文は柳田国男『山の人生』の一部分について論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

今では記憶している者が、私の外には一人もあるまい。三十年あまり前、世間のひどく不景気であった年に、西美濃の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子供を二人まで、鉞（まさかり）で殺したことがあった。

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あった。そこへどうした事情であったか、同じ歳（とし）くらいの小娘をもらって来て、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまった。何としても炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかった。最後の日に空手で戻って来て、飢えきっている小さい者の顔を見るのがつらさに、すっと小屋の奥へ入って昼寝をしてしまった。

眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であったという。二人の子供がその日当たりの所にしゃがんで、しきりに何かしているので、傍らへ行って見たら一生懸命に仕事に使う大きな斧（おの）を磨いていた。阿爺（おとう）、これでわたしたちを殺してくれといったそうである。そうして入り口の材木を枕（まくら）にして、二人ながら仰向けに寝たそうである。それを見るとくらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打落してしまった。それで自分は死ぬことが出来なくて、やがて捕えられて牢（ろう）に入れられた。

柳田国男の晩年の回顧録『故郷七十年』には柳田は明治三十五年（一九〇二）二月から大正三年（一九一四）まで法制局の参事官をしていたときに、予審調書などの関係資料を読んで特赦（とくしゃ）に関する事務を扱ったことが記されている。その中で、一番印象の深かった刑事事件の一つが『山の人生』に述べられているものであった。

さきの『故郷七十年』によれば、このかわいそうな事実を、柳田はだれかに話したくて、旧友の田山花袋に話した。

「（花袋の方は）そんなことは滅多にない話で、余り奇抜すぎるし、事実が深刻なので、文学とか小説とかに出来ないといって、聞き流してしまった。田山の小説に現われた自然主義というものは、文学の歴史からみて深い関係のある主張ではあったが、右

の実例のような悲惨な内容の話に比べれば、まるで高の知れたものである。［Ａ］、法制局の資料から見出した悲劇が私の心の底に溜（た）まっていて、いつかはそれを世に知らせたいという気持を持ちつづけた。それで、朝日新聞に書き、［Ｂ］『山の人生』という本を作る時、その序文のような形で、これを一番最初にもってきたのである」と柳田は述懐している。

柳田はここで、親しい友人であった花袋の文学などは、あの悲惨な内容の話に比べれば、まるで高が知れていると言い放って、軽侮（けいぶ）の念を隠そうとはしない。柳田の田山批判は、文学の否定につながるものではない。［Ｃ］花袋にかかわる文学者、［Ｄ］短編の名手といわれる志賀直哉をもち出してみても、『山の人生』の文章のように、簡潔でムダがなく、しかもその底に無限の哀れを誘う作品が書けたとは、とうてい思えないのである。その重い事実はフィクションに仕立てることの不可能なものであった。『山の人生』の中の男が「眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であったという」という箇所からは、小屋の入口に晩秋の夕日がカッと照っている光景がまざまざと浮ぶ。この夕日の描写があればこそ、Ｅこの光景は生きたものとなる。そこで柳田はたぐいまれなる文学的手腕を発揮し、調書にはない言葉をここに挿入（そうにゅう）したのではないか、と思いたくなるのも無理はない。たとい柳田は意識していなくても、彼の記憶の中では、それ以外にはあり得ない情景が何十年かの長い歳月をかけて育ったのではないか、というつよい疑いも生まれる。

あまりの飢餓に耐えかねて、子供たちが殺してくれと父に頼み、その父は子供の願いを受け入れて、大きな斧で殺してしまうという、殺人の動機と殺人の行為の間に、心理の入りこむ隙（すき）はまったくない。惨劇の立会人は晩秋の夕日だけであり、立会人となるために夕日は小屋の入口まで届いていなければならなかった。そこで子供たちは大きな斧を磨いていた。

その刹那（せつな）の光景が夕日に照し出されることで、Ｆあざやかに切りとられた瞬間が、永遠の光景に転ずることを読者は感じる。

人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた。おそいかかる飢餓という猛獣から逃げまわるのが精一杯のくらしをつづけてきた。Ｇ人間にもっとも普遍的な主題がここであらわにされている。

（谷川健一『柳田国男の民俗学』による）

問１　空欄 A ・ B ・ C ・ D のそれぞれにあてはまる適切なものを、次から一つずつ選べ。

①　それにしても　②　しかし　③　さらに
④　そんなわけで　⑤　たとえば

問２　傍線Ｅ「この光景は生きたものとなる」とあるが、どうして「生きたもの」となるのか。次から適切なものを一つ選べ。

①　夕日という自然の描写によって、暗い家の内部が照し出されることになるから
②　夕日という自然の描写によって、親と子の関係が照し出されることになるから
③　夕日という自然の描写によって、自然としてある人間が照し出されることになるから
④　夕日という自然の描写によって、罪を犯した父の悲惨さが照し出されることになるから

問３　傍線Ｆ「あざやかに切りとられた瞬間が、永遠の光景に転ずる」とあるが、「永遠の光景」とはどのような意味か。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　読者の前で事件の善悪がはっきりと呈示されること
②　読者の前で事件と季節が緊密に結びつけられること
③　人々の解釈を拒否し、事件そのものが脳裏に定着されること
④　人々の記憶に事件の悲惨さがあざやかに焼きつけられること

問４　傍線Ｇ「人間にもっとも普遍的な主題」とあるが、それは具体的にはどのような意味か。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　親子の血縁は切りがたいこと　②　飢餓から解放されたいと願うこと
③　殺人という罪悪感に悩まされること　④　重い事実を文学として作品化すること

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　谷川健一＝たにがわ　けんいち（一九二一〜二〇一三）東京大学文学部卒、民俗学者。日本地名研究所所長などを務めた。同じ筆者による柳田国男の「泣くこと」の分析はスタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第九講で扱っています。文章自体も、設問も意義深い内容ですので、ぜひチャレンジしてみてください

○柳田国(國)男＝やなぎた　くにお（一八七五〜一九六二）民俗学者。民俗学＝フォークロア→一般民衆の文化・風俗・習慣を研究対象にする学問。代表作品『遠野物語』（ざしきわらし伝説や河童伝説などをふくむ）『海上の道』。柳田国男自身の文章もスタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第一講その1で扱っています

○田山花袋＝たやま　かたい（一八七一〜一九三〇）日本における自然主義、私小説（ししょうせつ・わたくししょうせつ）の代表作的作家。『蒲団』『田舎教師』などの作品は文学史の試験問題にもよく出題されます。なお、私小説は、自分の私生活のありのままを描写することで人間の本質、自然を表現しようとする考え方。そのためストーリー性は重視されないことが多い。むしろ、破滅していく自分やダメな自分を赤裸々に描こうとする傾向が強い。虚構によって、ただし考え抜かれたフィクションによって人間とはなにかを追求しようとする作家とは対極的と言えます

○志賀直哉＝しが　なおや（一八八三〜一九七一）白樺派を代表する作家（旧制学習院高校の同人誌「白樺」のメンバー・ヒューマニズムや博愛を理念に掲げる）。主要作品として『城の崎にて』『暗夜行路』『和解』があります。こちらも文学史問題の常連さんで「短編小説の神様」とも呼ばれます。

語句

回顧＝かいこ→過去を回想すること・「懐古」が個人的な感傷、センチメンタルよりなのに対し、より公的なレベルで用います。（例）元大統領の回顧録・有名画家の回顧展
特赦＝とくしゃ→恩赦の一つ。有罪判決を受けたある者について、執行を免除すること
奇抜＝きばつ→思いも及ばないほど優れている・意表を突く・意外である
高の知れた＝たかのしれた→程度の知れた・程度の低い
述懐＝じゅっかい→思いや思い出を語ること・心中を吐露（とろ）すること
軽侮＝けいぶ→相手を軽く、低く見てあなどる、馬鹿にすること・軽蔑（けいべつ）・侮蔑（ぶべつ）
フィクション→つくりもの・虚構・創作物　対義語→ノンフィクション・ルポルタージュ・記録文学・ドキュメンタリー
刹那＝せつな→ごく短い時間

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）課題に一生懸メイ取り組む　①命　②明　③名　④銘　⑤瞑

（イ）企画会議でキ抜な提案をする　①機　②鬼　③紀　④器　⑤奇

（ウ）事実が悲サンで物語にできない　①散　②惨　③参　④酸　⑤算

（エ）内閣の決定により特シャとなる　①謝　②舎　③赦　④遮　⑤射

（オ）前大統領の回コ録を読む　①古　②来　③雇　④故　⑤顧

（カ）幼少期の思い出を述カイする　①回　②懐　③解　④誡　⑤開

（キ）提案理由を簡ケツにまとめる　①潔　②結　③決　④欠　⑤傑

（ク）最後に渾身の力を発キする　①気　②輝　③揮　④着　⑤機

（ケ）犯行の動キが明らかになる　①期　②気　③軌　④来　⑤機

（コ）人類は長くキ餓に苦しんできた　①鬼　②既　③飢　④忌　⑤危

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし**……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第十三講　民俗学

《本文の対比構造》

主役＝柳田国男の民俗学

『山の人生』の記録

飢餓と殺人という重い事実

殺人の動機と殺人の行為の間に、
心理の入りこむ隙はまったくない

飢餓に苦しむ人間の普遍的姿

主な対比

比較相手＝文学・小説

田山花袋／志賀直哉

フィクション・心理

《解説》

問１《接続語の空欄補充・選択肢》

［Ａ］は、〝したがって・そのため・そこで〟の仲間が入ります。空欄の前で、田山花袋には手におえないことが書かれていますね。「高の知れたもの」とまで表現しています。そのため「私の心の底に溜まっていて、いつかはそれを世に知らせたいという気持を持ちつづけた」わけです。というわけで「そんなわけで」の④が答えです。［Ｂ］は追加表現です。すなわち、「朝日新聞に書き」、加えて「『山の人生』という本を作る時、その序文のような形」で西美濃の山中の惨劇に触れたのです。したがって、「さらに」の③が正解。［Ｃ］は、前の文の内容を認めた上でそれを乗り越える形式です。〝なるほど、しかし〟（〝たしかに、しかし〟でも同じ）をいっぺんに表現しているといっていいでしょう。つまり、〝なるほど柳田国男は田山花袋を批判しているのであって、文学全体の批判ではないよ。だがしかし〟を一度に表現して①の「それにしても」なのです。②の「しかし」単独では不十分でした。［Ｄ］は「花袋にかわる文学者」として「志賀直哉」を具体例として導いています。したがって「たとえば」の⑤が正解になります。接続語の補充が四つありましたが、今回のこれらはスタンダードレベル以上で、ちょっとむずかしめでした。四つのうち、二つ正解できればよいでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

問４ともかぶりますが（そもそも各設問は関連しあってます）、この文章、あるいは柳田国男の『山の人生』の主題・テーマでは、最終段落にあるように、「人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた」ことです。つねにすでに、オールウェイズ&オールレディに人間は飢えてきた。これが人間の自然状態であったわけです。太陽もまたそれを見てきたはずですね。本文では「立会人」と表現されていますよ。だからこそ「この光景は生きたものとなる」のです。「人間にもっとも普遍的な主題」に焦点がいくからです。したがって、③が正解です。①の「暗い家の内部が照し出される」では、「夕日」が舞台やドラマの照明係になってしまいますよ。これは物理的スリカエの誤りです。②は「親と子の関係」を持ち出していますが、主題ではありません。主題は飢餓（および殺人）という「深刻」な「事実」ですからね。たしかに、親が子を思い、子が親を思うドラマや小説は存在しますが、今回のテーマではないということです。そうした親子の愛情や葛藤なら文学や小説が扱えるということを考え

ると、対比混乱の誤りです。④はどうでしょう。「悲惨さ」はＯＫです。本文にも、「悲惨な内容」や「惨劇」という表現がありますからね。しかし、「罪を犯した父」が悲惨なのではありません。飢餓そのものの方です。罪の有無や重い軽いは比べられていません。現に、特赦の対象になっていますしね。これは正しい対比喪失の誤りと言えそうです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「永遠の光景」はこれまた、問４および問２とかぶりますが、人間にとっていつでも変わらぬ「普遍的な主題」ということです。①の「善悪がはっきり」が×です。正しい対比喪失の誤りです。本文にある対比は〝人間にまつわる事実に焦点をあてる民俗学⟷人間の心理に焦点をあてる文学や小説〟です。善悪や罪の白黒をつける裁判ではありませんよ。②はどうでしょう。「季節」が×です。たしかに「晩秋」ということばは本文にありますが、初秋か、早春か、盛夏や真冬ではダメなのか、そんなことは比較になっていません。正しい対比喪失の誤りです。③はどうか。「事件そのものが脳裏に定着」はＯＫですが、「人々の解釈を拒否」が×です。本文に、「殺人の動機と殺人の行為の間に、心理の入りこむ隙はまったくない」とありますが、これは恨みや親子の愛憎のもつれが動機になっているわけではないよ、ということです。飢えという大昔から人間をおそってきたものがあり、今回の「西美濃の山の中」の出来事も飢餓による惨劇です。〝憎いから殺した〟という動機がない、そもそも存在しないということと「解釈を拒否」は違いますからね。記述に反する誤りと言えます。「事実」そのものの「深刻」さを表現している④が正解です。

問４《傍線部説明・選択肢》

直前に「人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた。おそいかかる飢餓という猛獣から逃げまわるのが精一杯のくらしをつづけてきた」とあります。「たえず」ですよ！　これぞ「普遍（いつでもどこでも）」の言い換えにふさわしいでしょ。したがって、②が正解です。文中の子どもたちがとった「飢餓から解放されたい」という願いは、斧で殺してもらうほどだったのです。①はどうか。「血縁は切りがたい」とありますが、記述に反します。また親子なら小説で書けますから、対比混乱の誤りです。さらに〝切りやすい関係⟷切りがたい関係〟など比べていませんね。また「親子の血縁」と比較になるものも出てきま

せん（女の子は親子でもありませんしね）。正しい対比喪失の誤りです。③は「罪悪感」が×です。何度も似たような間違いが登場しますね。問2の④や問3の①と同様に正しい対比喪失の誤りです。④は絵に描いたような対比混乱の誤りです。「重い事実」や深刻な「事実」に向き合うのは柳田国男の民俗学です。今回は「文学や小説」と対比になっていましたよ。

模範解答

問1　A＝④　B＝③　C＝①　D＝⑤

問2＝③　問3＝④　問4＝②

復習問題解答

復習問題　解答　第十三講

（ア）①　（イ）⑤　（ウ）②　（エ）③　（オ）⑤
（カ）②　（キ）①　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）懸命　（イ）奇抜　（ウ）悲惨　（エ）特赦　（オ）回顧録
（カ）述懐　（キ）簡潔　（ク）発揮　（ケ）動機　（コ）飢餓